

平成28年度厚生労働科学研究費補助金 エイズ対策政策研究事業

## 総括研究年度終了報告書

### 地域においてHIV陽性者と薬物使用者を支援する研究 (H27-エイズ-一般-001)

研究代表者：樽井 正義(特定非営利活動法人ぶれいす東京 理事／慶應義塾大学 名誉教授)

研究分担者：生島 嗣(特定非営利活動法人ぶれいす東京 代表)

肥田 明日香(医療法人社団アパリ アパリクリニック 院長)

大木 幸子(杏林大学保健学部看護学科 教授)

沢田 貴志(神奈川県勤労者医療生活協同組合 港町診療所 所長)

## 研究要旨

**研究目的** 私たちの社会では MSM における HIV 感染に性行動と薬物使用とが関連しているが、薬物使用に関しては、使用している・していないという単純な排他的二分があるのでなく、使用を勧誘され断る・断らない、使用を止める・続ける、回復への方策が見つかる・見つからないなど、時間軸に沿つたいくつかの分岐点があり、選択が分かれることが指摘されている。5つの分担研究からなる本研究では、MSM (HIV陰性者と陽性者、薬物未使用者と使用者)を対象とする質問紙調査および面接調査を実施して、それぞれの分岐点で使用あるいは不使用に導く諸要因を明らかにする。また不使用を促すために、地域の諸機関(医療、行政、NGO)に求められる支援を検討し、そのために有用な資料を作成する。

**研究方法** 3年計画の2年目である今年度は、次のように分担研究を進めた。

a. MSM の薬物使用・不使用に関わる要因の調査(生島)：新設したウェブサイト(LASH online, <http://lash.online/>)と N 社の男性同性愛者出会い系アプリで募集した対象者に、性行動、HIV の知識と予防、メンタルヘルス等広範囲にわたる 97 間の質問紙調査を行い、回答者 10,544 人中 7,587 人(72.0%)から全問回答を得た。

b. 地域の相談支援機関利用による HIV 陽性者・薬物使用者の回復事例の調査(大木)：8人の対象者に半構造化面接調査を行い、薬物使用および回復の諸要因を検討した。

c. 薬物使用者の依存症クリニック受診経緯の調査(肥田)：3人の対象者に面接調査を実施し、複線径路・等至性アプローチ(TEA)を参考に分析を行い、薬物使用と受診までの経緯を分析した。

d. 男性同性愛者が利用する施設の国際化に関する基礎調査(沢田)：ゲイスポットの飲食店経営者 5 人に半構造化面接調査を行い、外国人利用者の動向(国籍、日本語能力等)に関する情報を収集した。

e. 薬物依存からの回復を支援する社会資源の調査(樽井)：日本における薬物問題の現状を概観するために、使用の実態、刑事対応と法令、政策動向、依存症回復プログラムや自助グループ活動等の資源について、文献調査を行った。

**研究結果** a. 出会い系アプリを利用する性的にアクティヴな MSM を対象とする質問紙調査では、薬物使用の生涯経験率は 25.1% で、使用は主に性的関係においてであり、自ら進んでが 20.0%、相手から誘われてが 71.6%、知らずに摂取させられたが 8.3% だった。使用する理由は、セックスの快感や痛みの軽減(79.2%)、現実からの逃避や不安の軽減(69.7%)が多かった。使用の背景にあるメンタルヘルスの状態に

については、「K6 テスト」において注意を要するとされる 5 点以上が過半で、一般のおよそ 2 倍であった。

b. HIV 陽性者の薬物使用からの回復事例の調査では、使用を始める要因として、日常生活において性指向、薬物使用、そして HIV 陽性という「秘密をもつこと」による「生きづらさ」「居場所のなさ」が、使用からの回復の要因としては、反対に「秘密にする必要がない」「秘密を話せる」仲間や支援者との継続的な関わりが挙げられた。

c. 依存症クリニック受診者の調査でも、MSM が安心できる場(ゲイスポット)に性関係と薬物が存在していることが使用の契機となり、使用の継続、覚せい剤への移行、逮捕を機に依存症治療を提供する医療施設を受診という過程が見られ、使用と不使用の逡巡の中で安心して相談できる先が分からなかつたことが課題として示された。

d. ゲイスポットで外国人顧客が多い飲食店経営者に対する調査では、従来の欧米に加えて台湾、韓国、中国などアジアからが全体の 3 ~ 4 割と増加し、顧客が体調を崩した時に費用や言葉の問題への対処、観光客増加への対応が課題として挙げられた。

e. 日本における薬物使用の現状と対応の調査では、使用経験率は諸外国と比べてかなり低いが、その対策は犯罪取締りが主であり、回復プログラムの提供等健康問題としての対応は不十分で、民間の自助グループが回復支援を担っていることが指摘された。

## A 研究目的

本研究に先行する「地域において HIV 陽性者等のメンタルヘルスを支援する研究」(平成 24 ~ 26 年度)によって、私たちの社会では MSM の HIV 感染に薬物使用が関連していることが明らかになり、さらに薬物使用に関しては、使用する・しないという単純な排他的二分があるのではなく、使用を勧誘され断る・受け容れる、使用を止める・続ける、回復への方策が見つかる・見つからない等、時間軸に沿つた幾つかの分岐点があることが示唆された。これを受けて本研究では、MSM の間での薬物使用の現状の調査を進め、各分岐点で使用あるいは不使用に導く諸要因を探り、不使用を促すために、地域の諸機関(医療、行政、NGO、ウェブ関係者など)に求められる支援を検討する。

次の 5 つの分担研究により 1、2 年目に調査を行い、3 年目に結果を分析し、MSM に対する啓発資材と支援のための資料を制作する。

- a. MSM の薬物使用・不使用に関わる要因の調査(生島)
- b. 地域の相談支援機関利用による HIV 陽性者・薬物使用者の回復事例の調査(大木)
- c. 薬物使用者の依存症クリニック受診経緯の調査(肥田)

- d. 男性同性愛者が利用する施設の国際化に関する基礎調査(沢田)
- e. 薬物依存からの回復を支援する社会資源の調査(樽井)

## B 研究方法

a. MSM 調査では、ゲイスポット(ハッテン場やクラブ)関係者や web ツールの利用者 14 人を対象に個別の面接調査を行って質問紙を作成し、新設したウェブサイト(LASH online, <http://lash.online/>)と N 社の男性同性愛者出会い系アプリで募集した対象者に質問紙調査を行った。質問は性行動、HIV の知識と予防、メンタルヘルス等広範囲にわたり、回答者 10,544 人中 7,587 人(72.0%) が 97 問すべてに回答した。

b. 薬物使用から回復した HIV 陽性の MSM の事例調査では、8 人を対象に半構造化面接を行って逐語録を分析し、薬物使用および回復の諸要因を探った。さらにその支援者にも同様の面接調査を行っている途中である。

c. 依存症クリニック受診者調査では、診療録後方視的調査を MSM の 65 人について行い、使用者のプロフィール(使用薬物、感染症罹患等)を踏まえて、個別の面接調査を 3 人に行い、複線径路・等至性アプローチ(TEA)を参考に薬物使用と受診ま

での経緯を分析した。さらにグループ面接調査を行い、受診を促す契機を検討する。

d. 外国人 MSM の調査では、ゲイスポットにおける外国人利用者の動向(国籍、年代、日本語能力等)や生活背景に関する情報を収集するために、飲食店経営者 5 人に半構造化面接調査を行った。

e. 支援のための社会資源調査では、通報義務と診療義務の関係について法令解釈等を調査し、また日本における薬物問題の現状を概観するために、使用の実態、刑事対応とその基となる法令、政策動向、依存症回復プログラムや自助グループ活動等の社会資源について、白書や先行研究の調査を行った。

#### (倫理面への配慮)

「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針」に準拠して、研究計画書を作成し、特定非営利活動法人ふれいす東京など研究者の属する機関の倫理委員会の審査を受けた。

面接調査に際してはインフォームド・コンセントを取得し、研究には情報収集者が匿名化した試料を用いた。質問紙調査は無記名とした。

## C 研究結果

a の出会い系アプリを利用する MSM 対象者のウェブ調査において、薬物使用に関する主要な結果を挙げると、生涯薬物使用経験は 25% で、先行研究と同様に高率だった。薬物が使用されるのは、多くは性的関係においてであり、また自ら進んでが 20.0% に対して、相手から誘われてが 71.6%、知らずに摂取させられたが 8.3% だった。中間報告だが、使用する理由として多かったのは、セックスの快感や痛みの軽減(79.2%)、現実からの逃避や不安の軽減(69.7%)であった。反対に使用しない理由としては、危険(97.4%)、違法(96.9%)が最多であった。使用的背景にあるメンタルヘルスの状態については、「K6 テスト」において注意を要とする点以上が 56.3% (5 ~ 12 点 : 40.5%、13 点以上 : 15.8%) と一般のおよそ 2 倍で、先行する陽性者調査よりも高く、精神的健康度に課題があることが示唆された。現在、データクリーニングを進めているが、質問票には国内や海外のデータと比較

するための複数の変数を組み込んでいるので、今後はそれらの変数を用いて MSM の薬物使用に影響する具体的な分岐点の解明を行う。

b の HIV 陽性者の薬物使用からの回復事例の調査では、薬物の習慣的使用開始と不使用、使用継続、そして回復の分岐点の要因カテゴリーが抽出された。使用を始める要因として、日常生活において性指向、さらには薬物使用という「秘密をもつこと」による「生きづらさ」「居場所のなさ」があり、それが HIV 感染により強められること、非日常的な性関係の場では不安が薄れ居場所が得られることが指摘された。使用からの回復の要因としては、反対に「秘密にする必要がない」「秘密を話せる」仲間や支援者との継続的な関わりが挙げられた。

c の依存症クリニック受診者の調査でも、MSM が安心できる場(ゲイスポット)に性関係と薬物が存在していることが使用の契機となり、使用の継続から覚せい剤への移行、依存症になり止めようとしても止められず、逮捕を機によく依存症回復プログラムを提供する医療施設を受診、という共通する過程が見られた。使用と不使用の逡巡の中で HIV 感染、通報の恐怖といった問題に直面するが、安心して相談できる先が分からなかったことが、課題として示された。

d のゲイスポットで外国人顧客が多い飲食店(100 人規模のクラブバーでは 6 割、30 席のスナックでは 1 割が外国人)の経営者に対する調査では、かつては欧米人が多かったが今は 4 ~ 5 割で、台湾、韓国、中国などアジアが 3 ~ 4 割、他は南米、在住者(就職、留学)が過半だったが旅行者、出張者が増え、日本語ができない人が多いという現状が伺えた。経営者からは、顧客が体調を崩した時に、健康保険や言葉の問題があるので病院受診を気軽に勧めてよいか躊躇する、観光客が増える中でどう対応するか準備が必要と思う、との意見が聞かれた。

e の日本における薬物使用の現状と対応の調査では、いずれかの薬物の生涯使用経験率は 0.1% と諸外国と比べてかなり低いが、HIV 陽性者では全国住民調査より高い。薬物事犯検挙人員は 2015 年に 13,542 人で 2000 年頃の 7 割、内覚せい剤が 8 割、所持ないし使用も 8 割を占める。政策である 2013 年の第四次薬物乱用防止五か年戦略では、啓発の強

化、取締の徹底、国内流入阻止、国際連携と並び治療と支援も6つの目標の一つとされ、刑の一時執行停止制度の施行に伴い促進が望まれるが、現状では回復プログラムを提供している精神科医療機関は5.1%に過ぎず、回復支援の少なからぬ部分を、民間の自助グループの活動に依存している。

## D 考察

### (1) 感染と薬物使用の予防への介入について

中間報告ではあるが、性的にアクティヴな MSM を対象とする調査からは、先行する陽性者調査と比較すると、薬物使用の経験率は生涯でも過去1年でも低いが、メンタルヘルスの状態を測る「K6 テスト」で要注意とされる5点以上の割合はむしろ高く、一般のおよそ2倍であることが明らかになった。このことから、より焦点を絞った集団に、より適切な予防介入を検討すること、そのために協力を得たアプリ等と連携することの必要性が認められる。

この調査と、HIV陽性者および依存症クリニック受診者の調査の調査から、薬物使用を勧誘され断る・受け容れる、使用を止める・続ける、回復への方策が見つかる・見つからない等の分岐点に作用する幾つかの要因が示された。それら要因をさらに解明し、有効な介入の方策を検討することが課題となる。

また、増加する外国人 MSM の動向から、とくにアジア近隣諸国出身者の増加が示唆された。外国人の感染報告の中心が開発途上国出身の異性愛者から、それに限定されない男性同性愛者へと移行していることからも、外国人 MSM に対して感染予防、検査、治療に関する情報を提供することが要請される。

### (2) 依存症回復と生活相談への支援について

薬物使用の現状と対応についての調査からは、私たちの社会における薬物使用は主として処罰されるべき犯罪と見なされ、これを健康問題と捉え、依存症からの回復や社会生活への復帰を支援する努力は不足していることが示された。法律と刑罰だけによって薬物使用を制御することは望めない。

薬物使用経験者を対象とする二つの調査からも、使用を止めるに止められない状況における相談先の

必要性と、そうした経験と使用の背景を共有し安心できる自助グループへの参加の有効性が指摘された。2016年に始まる刑の一部執行猶予制度は施設内処遇と社会内処遇との連携を図ろうとしているが、それが実効を挙げるためにも、薬物使用者とその関係者を支援する公的機関と民間団体の活動の充実が求められる。

### (3) 性的指向に対する差別と偏見について

中間報告だが、MSM のウェブ調査では、子どものころ性的指向ゆえにいじめを受けた経験をもつ者が34.8%、それ以外のいじめは33.4%、また親からの暴力を17.2%が経験しており、薬物使用につながるメンタルヘルスの悪化の背景に、性的指向に対する差別と偏見があることが指摘された。社会において、とくに医療の場で、差別と偏見から理解と受容への転換を促進することが強く要請される。

## E 結論

MSM の間での HIV 感染には、薬物使用が関与している場合がある。薬物使用については、性的パートナーから勧められて始める・断る、習慣化する・しない、依存が形成される、回復プログラムに繋がるといったいくつかの分岐点が経験されているが、本研究においては、こうした分岐点を同定すると共に、そこに作用する要因が指摘された。また、薬物使用の背景に、性的少数者への差別と偏見によるメンタルヘルスの問題があることが確認された。これらを踏まえて、使用と感染を予防する介入策の検討が期待される。

分岐点における逡巡や葛藤について安心して相談できる窓口の、また医療機関における依存回復プログラムの必要性とともに、自助グループによる回復支援の有効性も指摘された。薬物使用と HIV 感染の問題を取り組むには、薬物使用を健康問題と捉え、MSM を支援する公的機関と民間団体の活動の充実が求められる。

## F 健康危険情報

なし

## G 研究発表

### 1. 論文発表

- 1) 生島嗣 . HIV 陽性者支援の現場から——MSM(男性とセックスをする男性)への支援を中心に . こころの科学 . 186: 52-56, 2016.
- 2) 生島嗣 . LGBT と HIV. こころの科学 . 189: 62-65, 2016.
- 3) 生島嗣 . ぶれいす東京の活動について . 病原微生物検出情報 . 37, 9: 8-10, 2016.
- 4) Hayashi, K., Wakabayashi, C., Ikushima, Y., and Tarui, M. High prevalence of quasi-legal psychoactive substance use among male patients in HIV care in Japan: a cross-sectional study. Substance Abuse Treatment, Prevention, and Policy. 12(1): 11, 2017.

### 2. 学会発表

- 1) 樽井正義 . エイズ対策における人権への配慮 その実績と課題 . 日本エイズ学会、2016 年、鹿児島 .
- 2) 生島嗣、野坂祐子、山口正純、藤田彩子、大島岳、三輪岳史、大槻知子、林神奈、樽井正義 . MSM の薬物使用・不使用に関する要因の調査～薬物使用経験のある MSM を対象としたインタビュー調査から . 日本エイズ学会、2016 年、鹿児島 .
- 3) 佐藤郁夫、福原寿弥、生島嗣、岩橋恒太、荒木順子、岡慎一、高野操 . 医療機関と NGO の連携による HIV 検査キット配布会における対面相談希望者の相談内容に関する検討 . 日本エイズ学会、2016 年、鹿児島 .
- 4) 高野操、岩橋恒太、荒木順子、佐久間久弘、木南拓也、生島嗣、佐藤郁夫、中山保世、小日向弘雄、友成喜代美、土屋亮人、杉野祐子、池田和子、小形幹子、田中和子、市川誠一、菊池嘉、岡慎一 . 医療機関と NGO の連携による郵送検査の手法を用いた HIV 検査の取り組み . 日本エイズ学会、2016 年、鹿児島 .
- 5) 岩橋恒太、高野操、荒木順子、木南拓也、佐久

間久弘、生島嗣、市川誠一、岡慎一 . 医療機関と NGO の連携による、MSM を対象とした HIV 検定 “HIVcheck” における啓発とキット配布体制に関する検討 . 日本エイズ学会、2016 年、鹿児島 .

6) 肥田明日香、藤田彩子、白石玲子、中山雅博、樽井正義 . 薬物依存症クリニックを受診している MSM の受診までの経緯—診療録調査から . 日本エイズ学会、2016 年、鹿児島 .

7) Ohtsuki, T., Wakabayashi, C., Ikushima, Y., Yamaguchi, M., and Tarui, M. Resolved and unresolved issues among people living with HIV in Japan after 10 years of advancement in medical environment: results from nationwide multicenter surveys from 2003 to 2013. The 21st International AIDS Conference, July 18-22, 2016, Durban, South Africa.

## H 知的財産権の出願・登録状況

(予定を含む。)

1. 特許取得  
なし
2. 実用新案登録  
なし
3. その他  
なし